

論壇時評

中 嶋 嶺 雄

論壇活性化のために 編集者は労惜しむな

最近の総合雑誌に於いて痛感するのは、編集者があまりにも画一的であることだ。今月は、どの雑誌をめぐっても大韓航空機事件とロッキード判決がメインになっている。だが、前者については、新聞や一般の週刊誌がさんざん書いたあとなので、よほどユニークな視点なり、新しい情報なりが出ていないければ一番煎じの感は否めない。しかも、事件についての決定的な謎は解けていないのだから、なおさらランパターの編集は避けるべきだと思う。後者については、主要論議の発端日が10・12判決以前なので内容的にとらしても剛靴掻痒(か)つかそうよ)の感がある。

論壇活性化のためにも、やはり編集者は、編集者としてとるべき労を惜しむべきではなからう。

たとえば、来年はいよいよヨシ・オーウェルが予測した「一九八四年」である。オーウェルを調べてみると、彼の書き手のビルマ体験は「一九八四年」にどこも欠かせないテーマ

マである。それなのに、不思議な社会主義的ビルマとオーウェルを取りを期待したい。

説得性に富んだ提言

▲高坂正典「対ソ連・三つの行動原則」

柳田邦男「大韓航空機事件を冷静に見る眼」▼

情報問題としても論じ、抜群

「ボーランド」といえば、藤村信が「ボーランド」一九八四年「世界」を奪って「ポロ」コミュニケーションを保つことと「一九八四年」をまさに典型的に象徴します」と語っている。政治エリート、官僚エリート



文化



権野 風彦・画

ト、軍部、警察(い)つ四つの支配集団が支える共産党独裁権力下のポーランドの現状を「オーウェルの世界」そのものとして描く藤村の筆は、印象的だ。

「注意深いデタント」 政策」の必要を強調

現れないのはなげだか、などと考えていたらラングーンで碎ての論議だが、わが国の対ソ政策として論じたものななかで、先月にも触れた高坂正典の

論点「対ソ連・三つの行動原則」(諸君)がもっとも説得性に富んでいる。高坂は第一に、「対立関係を危険なものとしないうち、軍備管理が不可欠の重要性を持つ」といい、第二には、「世界各地でソ連にチャンスを与えないようにする」と「つまり、「紛争の原因を除くための非軍事努力」の

「核戦略論の政策的破綻」(世界)もいっしょに、「この悲劇的な事件は、しるぎをけする米核軍拡競争のまさに交錯する地点で起きたことを忘れてはなるまい。在日韓国人の崔書勉と李健は、座談会「KAL機撃墜事件を考える」(自由)で、「韓国ではわれわれが世界各国に「迷惑をかけた」という気持ちがあります」(崔)といひ、また、「この事件を契機に「韓国は富国強兵をやるべきだ」という考え方はとるべきではない」「(李)と語っている。ラングーン事件にもつながら重要な意見だといえよう。

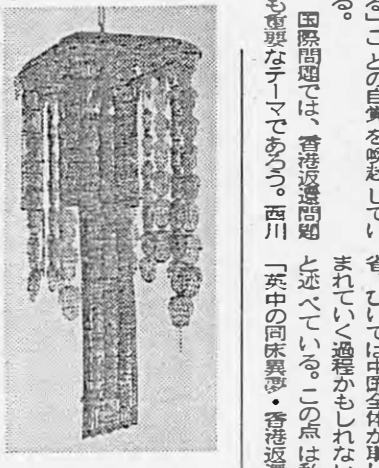
自動システムにひそんでいる落とし穴
一方、大韓機事件を情報問題として論じたものななかでは、

軍機関係「赤い星」の七月十六日付論文「南朝鮮—ペンタゴンの核基地—」を紹介しつつ、「ソ連につけ込む「スキ」スパイ飛行説をしりぞけ、「ナブ・スイッチ」ミスの可能性を論じているのだが、それを「高度なエレクトロニクス技術の粹

生みだる作家。一九四八年生まれの作家。彼女の芸術は師の世界の全面的独創より素直さと頑張りがあり、これは絵の具の不透明度かとも思う。(寺田 千聖)

彼女の芸術は師の世界の全面的独創より素直さと頑張りがあり、これは絵の具の不透明度かとも思う。(寺田 千聖)

「深淵・廈門経済特別区を行く」(諸君)のなかの見方とも一致している。木犀庵「香港の行方」(自由)が「香港の帰郷を「南北行」という在来の華僑商人集団に焦点を当てて論じた興味深いレポートであり、私も思わず目を見張ったものである。



「金銅花頂帽」

(東外大教授、国際関係論)も重要なテーマであった。西川「英中の同味異夢・香港返還問題」(李)と語っている。ラングーン事件にもつながら重要な意見だといえよう。

金工に的を絞ったユニークな展覧会三つ
わが国の金属工芸に的を絞った二つのユニークな展覧会が、期せずして都内二つの国立博物館、美術館で開かれている。一つは弥生時代から明治初期に至る金工の歴史を、時代を特徴づける作品によってとらえた

このうち「日本の金工」では、



一方「モダニズムの工芸家たち」展は、高村のほかに阿波良、大須賀、山崎寛太郎ら十人の作品百十三点で、内藤春治の「壁面への時計」のよう

ものほかに、も思切れば筆力だが、画面の